



中央聖書神学校在学時、母教会からこのような報告を受けました。今まで何人か来ていた日曜学校の生徒数が0になってしまった。その報告は少なからず私にとってショックでした。私は日曜学校を通じて救われ、洗礼の決心をすることが出来ました。イエス様の為に生きたいと献身の告白に至ったのも、日曜学校の種まきがあったからこそでした。そして中央聖書学校に入るまで、仕え続けていた日曜学校が無くなる、私は駒込の地（神学校の場所）から祈る事しか出来ませんでした。

日曜学校の先生達はそこであきらめることなく、立ち上がりました。日曜日に公園に出かけ、子供達にトラクトを配るようになりました。時には、公園でそこで会った子供たちと遊び、帰るという事を繰り返しました。又、日曜学校が始まる前に1時間の祈禱会を続けました。引退した小学校の先生がボランティアで近隣の子供達に勉強を教えるようになりました。そこで何人かの子供達が教会に興味を示し、教会学校に行くようになりました。そこから友達が友達を呼び、現在母教会では10名近く日曜学校に訪れるようになりました。その日曜学校の様子をビデオにして送ってくれたのを見た時、私は泣きました。なぜなら教会学校の先生達は現状に落胆するだけではなく、主がこれから成そうとすることに期待して一歩踏み出して、その歩みを止めなかったからです。

パウロが努めた一事とは、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進むことです（ピリピ 3:13-14）うしろのものとは今日学んだ様に過去の良い体験と悪い体験です。私達は時々それらに縛られる事があります。つまり過去の功績や実績、あるいは失敗や挫折に依存してしまうという事

です。イエス様は私達に今までどれだけ失敗してきたか、どれだけの功績を残してきたか関心がありません。関心があるのはこれからどれだけ私という器を通じて神の栄光を現わしていくかです。私達に力が無く、無力だとしても、私達を輝かせてくださる方は力ある神様なのです。死から命へ移す神の栄光が私達の内から輝くのです。私達の賜物を通じてそれが自分から相手へ伝わっていき、人はイエス様を知るようになります。私達はそのような大役にあずかっている事を知る時、今まで握りしめていたものから手を放し、パウロのように、主がこれから成そうとすることを見上げて前進していく事が出来るようになります。上へ召して下さるのは我らの主イエス様です。その主を見上げて共に前進してまいりましょう。

